

白選五十一首



河野裕子

かわの・ゆうこ 1946年、熊本県生まれ。京都女子大学在学中に角川短歌賞受賞。現代歌人協会賞、現代女流短歌賞、若山牧水賞、紫式部文学賞などを受賞。歌集に『桜森』『歩く』など10冊。毎日歌壇、塔、NHK学園などの選者。

逆立ちしておまへがおれを眺めてた たつた一度きりのあの夏のこと 「森のやうに獣のやうに」
たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

青林檎与へしことを唯一の積極として別れ来にけり

ブラウスの中まで明かるき初夏の日にけぶれるごときわが乳房あり

今刈りし朝草のやうな匂ひして寄り来しときに乳房とがりゐき

胎児つつむ囊ふくろとなりきり眠るとき雨夜のめぐり海のごとしも

しんしんとひとすぢ続く蟬のこゑ産みたる後の薄明に聴こゆ

君は今小さき水たまりをまたぎしかわが磨く匙のふと暗みたり

土鳩はどどつぽどどつぽ茨いばら咲く野はねむたくてどどつぽどどつぽ

たつふりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり

君を打ち子を打ち灼けるごとき掌よざんざんばらんと髪とき眠る

「ひるがほ」

「桜森」

今度の家に引越してきて今年で六年目。どうやらこの家が終ついの住み家になりそうである。住み始めた頃、つれあいの永田和宏が、静かすぎて静かなことを忘れると言ったことがあるが、それほど静かである。人の声はあまりしない。代わりに朝早くからカラスが鳴きだす。雀すずめが鳴く。鳩はとが鳴く。鶉うらが騒ぐ。藪くさの向こうの家の犬が吠える。その家の鶏舎では五、六羽の鶏を飼っているのだが、その中の雄鶏おんどりとおぼしき一羽が、何を間違えたか去年の暮れ頃から、四六時中キョッキョッキョーと鳴きだした。

雄鶏は明け方に鳴くものと思っていたし、確かにこの間まではまともな時間帯にコケコッコーと威勢よく鳴いていた。一日家に居る

みづうみの湿りを吸ひてどこまでも春の曇天膨れてゆけり

子がわれかわれが子なのかわからぬまで子を抱き湯に入り子を抱き眠る

しらかみに大き楕円を描きし子は楕円に入りてひとり遊びす

斑まだらうした牛たけ体のぼのと揺らしつつ陽あたる窪地に集ひゆく見ゆ

昨夜よべわれを領しるし手がしらかみにかくも無造作に垂線おろす

鬱がちの家系の尖さきに咲きゆるび茗荷のはなのごときわれかも

暗がりに柱時計の音を聴く月出るまへの七つのしづく

たつたこれだけの家族であるよ子を二人あひだにおきて山道のぼる

いつしんに包丁研いでるときに睡魔のやうな変なもの来る

しつかりと飯を食はせて陽にあてしふとんにくるみて寝かす仕合せ

ふりむきし母は眼鏡をかけてある子供の日ひのよそのをばさんのやうに

良妻であること何で悪かろか日向の赤ましま扱しきて歩む

わが顔によその誰かの顔がきて勝手に齡をとりゆく心配

てのひらに載るほど遠景の夫子つまらを紅梅の木ごと掬はむとせり

たんぽぽのぼほのあたりをそつと撫で入り日は小さきひかりを収しまふ

このひとは私の夫であるゆゑにこはいよ時とき見えなくもなる

一粒づつぞくりぞくりと齒にあたる泣きながらひとり昼飯を食ふ

こ糸揃へユウコサンとわれを呼ぶ二階の子らは宿題に飽き

灯ともれる家にはわたしが待つことを必ず忘るな雨の桜やなぎ桃もも

あと三十年残つてゐるだらうか梨いろの月のひかりを口あけて吸ふ

「はやりを」

「紅」

「歳月」

「体力」

と、昼も夜も真夜中もこのキョッキョッキョッキョーが聞こえる度に神経が平衡感覚を無くすような不安な気持になるのはどういうことだろう。鶏の身のうえに何が起こったのだらうと、初めからわかりもしないことをいろいろ考えているうちに、鶏に同情してしまうというのもわれながら変な話だ。

今日は朝から土砂降りになり、つまらなくなつて寝転んでいるうちに昼寝をしてしまい、半分眠つた耳で鶏の声を聞いてみると、それがギョテギョテ、ギョテギョテと聞こえる。そのうちにギョオテ、ギョオテと聞こえだした。あれ、と思つているうちに、ゲテ、ゲテと言つている。何だあの鶏は、ゲテ、ゲテと鳴くのかと妙に納得した気分めで眼が覚め、このことを誰かに言わなければと思つているうちに、またキョッキョッキョッキョーが始まつて階段の踏み段を二、三段落とされた気分になつた。

今年の梅雨はうんざりするほど長く、梅雨があけても夏らしい日は数えるほどもない。けれど陽が照る日は、蝉がいつせいに鳴きだてる。夕暮れになつても夜中になつても精神的に鳴く蝉声といつしよになつて、狂つたやうにキョッキョッキョッキョーが鳴きつづけるのを、暗い湯ぶねの中で聞きながら妙な八月が過ぎてゆく。

第三のコースに呼ばれ立ちあがる紺の水着のなかの浜木綿
浴室の磨硝子の向かうに屈む子を大きな蚤のやうにも思ふ

子らが老い私が死んでもずつとまだ母親が続くずつと私は

今死ねば今が晩年 あこの無き鵬のよこがほ西日に並ぶ

やはらかな縫ひ目見ゆると思ふまでこの人の無言心地よきなり

コスモスの花が明るく咲きめぐり私が居らねば誰も居ぬ家

こまやかに黄のかたばみが咲きてをりあなたに多くの借りあるこの世

こつとんと空缶のなかに椎ひとつ落ちてみたり子も居なくなり

二階家の屋根をはるかに越えてあり照葉の真椿月の夜に照る

捨てばちになりてしまへず 眸のしづかな耳のよい木がわが庭にあり

眼ふかくあなたはわたしに何を言ふともずつと長い夜のまへに

「家」

「歩く」

歩くこと歩けることが大切な一日なりし病院より帰る

あつき煮て病む身養ふことごとこと人のこころに近づく

滾る湯に菠薐草を放ちたりわつと噴きくるヨモツヒラサカ

この身体疲れるるなり昨日の夜は早寝するまへ泣きたり一度

何といふ顔してわれを見るものか私はここよ吊り橋ぢやない

さびしいよ、よよつと言ひて敷居口に片方の踵でバランスを取る

掃き寄せて掃き寄せて椋の葉よ昨日まで知らなかつた病氣のことは

わたしよりわたしの乳房をかなしみてかなしみある人が二階を歩く

「日付のある歌」